

第2章 調査の経過

1. 調査に至る経過

岡山大学津島地区構内における本格的な発掘調査は、1982年度に行われた津島岡大遺跡第1次調査に始まり、1992年度までに8次にわたる発掘調査が実施され、各地点で良好に遺構・遺物が包含される状況が確認されていた。

こうした状況下で、工学部生体機能応用工学科が新設されることとなり、校舎の建設が計画された。建設予定地は1988年度に工学部の建物建設計画に際して行われた6ヶ所の試掘調査⁽¹⁾の範囲内にあたるとえ、その試掘結果をもとに1988～1989年度に実施した生物応用工学科棟建設にともなう発掘調査⁽²⁾（津島岡大遺跡第6次調査）地点の東隣りに接する。上記の試掘・発掘調

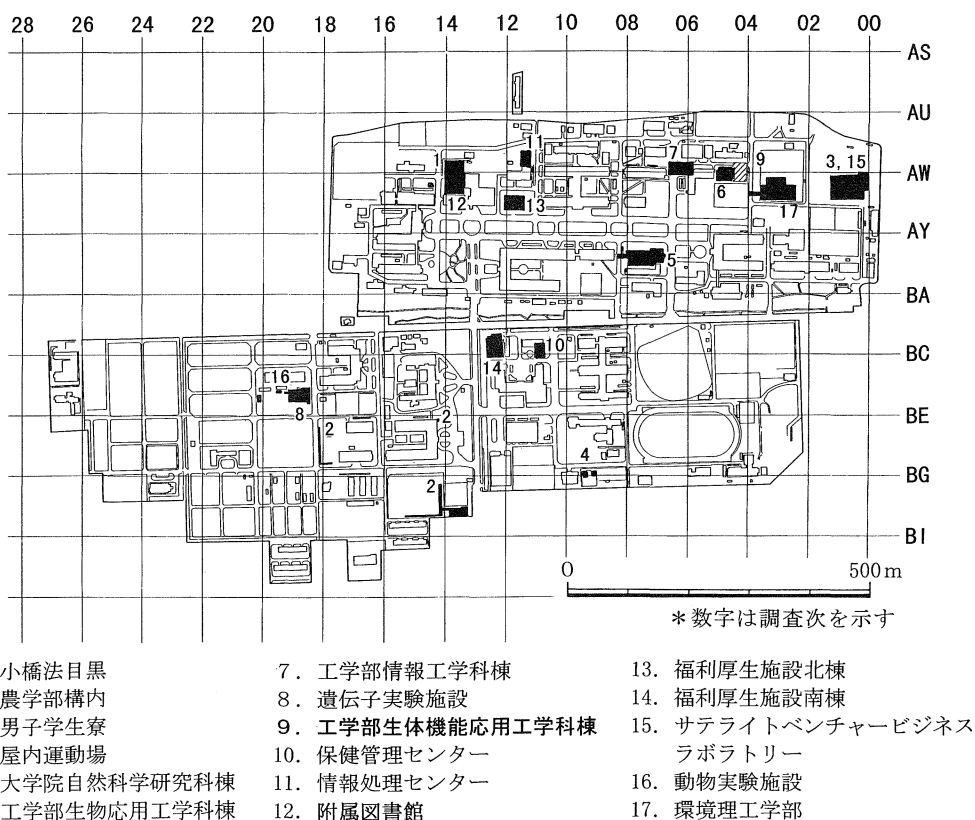


図2 津島地区構内座標と各調査地点

調査の経過

査の成果からは予定地に縄文時代から近世・近代におよぶ遺跡が広がることは明白であり、発掘調査を実施することとなった。特に第6次調査で注目された縄文時代後期の貯蔵穴群と古代の大溝に関しては、より詳細なデータの確認が期待された。

上記の経過をうけて、1992年7月1日から調査面積630㎡、調査員2名で本調査を開始した。

2. 調査組織

調査体制

管理委員会

学 長	高橋 克明	教養部長	脇本 和昌
文学部長	好並 隆司	自然科学研究科長	富永 久雄
教育学部長	伊澤 秀而	資源生物科学研究所長	兼久 勝夫
法学部長	江口 三角	附属図書館長	萬成 勲
経済学部長	神立 春樹	医学部附属病院長	松尾 信彦
理学部長	山口 恒夫	歯学部附属病院長	松村 智宏
医学部長	木村 郁郎	地球内部研究センター長	松井 義人
歯学部長	中後 忠夫	医療技術短期大学部長	喜多嶋康一
薬学部長	田坂 賢二	学生部長	長堀 金造
工学部長	河野伊一郎	事務局長	大谷 利治
農学部長	河津 一儀	埋蔵文化財調査研究センター長	稲田 孝司

幹事

庶務部長	田中 武雄	経理部長	山口 健太郎
施設部長	北原 實		

運営委員会

文学部教授	稲田 孝司 (センター長)	農学部教授	千葉 喬三 (調査研究専門委員)
文学部教授	狩野 久	教養部教授	定兼 範明
教育学部教授	高重 進	文学部助教授	新納 泉 (調査研究室長)
工学部教授	本田 和男	施設部長	北原 實

調査主体 高橋 克明 (岡山大学学長)

調査総括 稲田 孝司 (埋蔵文化財調査研究センター長)

調査主任 土井 基司（埋蔵文化財調査研究センター調査研究員）

調査員 松木 武彦（埋蔵文化財調査研究センター調査研究員）

阿部 芳郎（ " " ） 1993,1

富樫 孝志（ " " ） "

山本 悦世（ " " ） "

3. 調査の経過

調査は1992年7月1日から造成土掘削を開始した。機械による造成土取りも10日程度で終了し、7月10日からは本格的な発掘調査に入った。以後は、津島岡大遺跡第6次調査の成果や試掘のデータを踏まえ、明治層・近世層・中世層・古代層と、それぞれの面で耕作関連遺構（溝・畦畔・畝・野壺など）の調査が続いた。いずれの面も砂を被る保存状況の良好なもので、平面的な広がりからも、6次調査以上に耕作遺構の有機的関係を捉えることができたといえる。

古代層の調査では、10月初旬に、調査区北半にあたる微高地部（耕作域）と同南半部を東西に走る大溝の最上層溝の調査を終了した。この段階で調査方法の再検討を行い、その後は調査区を大きく微高地部分と古代大溝部分とに二分し、それぞれの調査を分離して進めることとした。その理由は、次のような点にある。大溝は本調査の中でも特に重要視される遺構であり、少なくとも4条の溝が複雑に重複するなど良好な遺存状態を考えると、十分な調査にはある程度の時間が必要である。それに比べ、微高地部は土量も遺構も格段に少ない。こうした両者の調査を併行して進めると時間的効率を著しく低下させるという判断からである。微高地部は10～11月に古墳時代後期・前期層（10・11層）の調査を実施した。大溝部の調査は10月を中心に進み、溝の掘り換えと掘削面との関係や複雑に掘り変えられた状況を明確にすることができた。11月に入ると大溝の調査も終了し、同溝の周縁部を含めて11月中に古墳時代後期・前期の調査を終え、微高地部の調査に追いつく状況に至る。

ここで、本来の調査方法に戻すことも可能であった。しかし、下層確認の結果、調査区南半部は縄文時代の遺構が非常に深いレベルに存在し、調査土量が北半部に比べ格段に多い状況が確認されたため、調査区南半部の縄文対応層への掘り下げの必要性が急務と判断された。幸い、大溝部分は古墳～弥生時代層がほとんど消失し遺構への影響も少ないことから、周囲に先行して同層まで掘り下げの方針を立てた。11月中に一部で縄文層の掘り下げにかかり、12月には貯蔵穴の存在などを確認した。大溝以外の範囲では12月に弥生時代層（12・13層）の調査をほぼ終了した。その中で大溝以南の狭い範囲では、引き続いて縄文時代対応層への掘り下げを進めた。

調査の経過

1月には北半部では、弥生時代前期～早期対応の「黒色土」の調査を終え、南半部では下層の確認を行いながら、縄文層の掘り下げを継続していた。その間、弥生前期に対応する溝や比較的初期に検出していた縄文時代貯蔵穴の調査も併行して行っている。このように、古代大溝の影響が消失した段階で、調査区は縄文時代の微高地部（調査区北半）と谷部（調査区南半）とに二分される形となったが、土層面の統一は困難で、各地点で順次掘り下げを進めるといふ、モザイク的調査を継続した。

全体が縄文時代の面に揃い、谷部で数基の貯蔵穴が調査された状態で、1月23日に現地説明会を実施した。その後、調査の進行を鑑み、1月末以降は調査員を2名から4名に増員して調査体制の強化を図った。

その後、微高地部では23層上面での縄文時代遺構の本格的な調査を開始し、基盤層の23a層で焼土土坑・溝などの調査を行った。一方、谷部では掘り下げの途中、弥生対応層（18層）で一部溝を検出したが、東半部は大半が消失しており、中央土手・調査区壁などで全体像を復元することとなった。2月には、貯蔵穴を中心とした縄文時代の遺構の調査が進む中、南端部の基盤層と考えた22層上面の土器群を調査しつつ、最終確認を行ったところ、より下層（23b層）で土器が出土し、基盤層が23c層であることが判明する。土器群周辺は土坑なども含めて、便宜的に設定したグリッドに沿って記録・取り上げを行った後、さらに掘り下げを進め、23層で貯蔵穴などの調査を実施した。貯蔵穴は合計10基となり、中にはアンペラ（樹皮製繊維で編まれたカゴ）の残存も認められた。アンペラの取り上げを行い、2月19日に全体写真撮影とともに発掘調査を終了した。

註

- 1 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『岡山大学構内遺跡調査研究年報』6 1989
- 2 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『津島岡大遺跡』6 1995